

竹中恵美子編著

『グローバル時代の労働と生活—そのトータルティをもとめて—』

伊藤セツ

本書は、40年余、大阪市立大学経済学部で研究と教育に携わり、経済学部長も歴任された竹中恵美子氏の定年退職（1993年3月）を記念して編まれた論文集である。本書には、今日なお社会政策学会の幹事として学界をリードしておられる氏を先頭に、氏の門下生と、氏と学問的交流の深かった13名の研究者の、理論的刺激に富む力作が、3部構成で配列されている。3部とは、労働市場論、社会政策論、女性労働論であって、この柱建てこそ、竹中氏が40年余、いずれおとらぬ業績を積み重ねられた3つの領域、3本の柱である。

本書の序において、氏は「今日ほど、既存の学問分野の枠組み、あるいは分析方法について、根本的な見直しを迫られている時代はない」と書かれている。氏の後を、年齢にして10年遅れで追っている私もここ数年、その事を考えない日はない。氏は、「根本的な見直し」に、「フェミニズム視点」、とりわけ「マルクス主義フェミニズム理論」を用いて迫られることとなった。

氏が「マルクス主義フェミニズム理論」で従来の女性労働論を再構成する試みを世に問われたのは1980年の論文「労働力再生産の資本主義的性格と家事労働—家事労働をめぐる最近の論争によせて—」（『経済学雑誌』81巻1号）であり、それを社会政策学会の潮流に乗せたのは、忘れもしない1984年の秋、弘前大学で開催された社会政策学会第69回研究大会での事であった。

それは、1970年前後からの欧米のフェミニスト視点での研究動向に無関心だった学会に対する一種の挑戦でもあった。

この10数年、氏は欧米のマルクス主義フェミニズムの動きから目をはなさなかった。その渉獵の結果が、本書に収録された1989年の竹中氏の論文「80年代マルクス主義フェミニズムについて—Patriarchal Capitalismの理論構成をめぐって—」である。氏によれば、「先進資本主義における労働市場の性別セグリゲーションを規定する家父長制的資本主義概念の提示と、資本制と家父長制の接合様式をめぐる、80年代マルクス主義フェミニズムの論争の検討」としてこの論文を書かれている。

氏は、「フェミニズム視点」は「日本的経営、国家の社会政策、企業別組合など、国家、企業、労働組合などの社会的アクターのビヘイビアに対する批判的視座を提供する」ものとしても評価される。新しい「フェミニズム視点」は、「ジェンダー分析」を切り口とする。従って氏の関心は「現代資本主義におけるジェンダー分析の課題」へ向けられ、その課題の第1は、ジェンダーの国際的再編成の理論分析、第2は、賃労働における性差階層性の理論化であるとされるのである。

経済還元主義・階級一元論では、女性労働の問題は解明されないことが、「フェミニズム視点」から指摘されて久しい。今や、女性労働問題どころか、労働問題研究そのものが、ジェンダー

関係の分析によらなければ解明されないという認識へ、「フェミニズム視点」によって誘導されている。日本の、圧倒的に男性研究者によって主導された労働問題研究に、この視点を導入したのはやはり、竹中氏であり、竹中氏が始めて置いた足場からさらに、次世代の「フェミニスト社会政策学者」が、竹中氏を批判しながらも勢いよく飛び立っているのだ。本書に収録された竹中氏の論文を読みながら、氏のはたした学会史上での役割を、氏のコーディネイトによる「現代の女性労働と社会政策」をテーマとした1992年春の社会政策学会第84回大会の鮮やかな思い出とともに、私は再確認する事が出来た。

さて、本書に収録されている論文全体に目を向けてみたい。

第1部は、現代の労働市場論—その現在と課題—のテーマのもとに、1980年代の労働市場の理論と実証的研究が、福原宏幸(「80年代労働市場にフレキシブル化の現実と課題」)、宇仁宏幸(「日本の蓄積体制と就業構造変化」)、福田義孝(「日本における労働者意識の変化と就業行動への影響」)、朝日吉太郎(「ドイツにおける労働市場の展開について」)の4氏によって行われ、柱建てとしては、1960年代の労働市場論の竹中氏の研究を継承する。

第2部は、社会政策の新視点—労働・生活過程—のテーマのもとに、新しい視点からの日本の社会政策論が、玉井金五(「社会政策のアジア間比較—日本の経験から—」)、坂口正之(「戦後公的年金政策と女性の年金」)、伊田広行(「シングル単位論観点による社会保障制度・税制度の再検討」)、野口隆(「地域における社会サービス供給と地方老人保健福祉計画」)、石川両一(「自

主福祉運動の新たな展開と課題」)の5氏から寄せられている。カップル単位を基準とする社会諸制度を批判し、シングル単位の政策体系への変更を主張する伊田論文が、ジェンダー・バイアス批判として、ジェンダー・ニュートラルに、脱フェミニズムのニュアンスで論じられているのは、伊田氏が竹中氏の「フェミニズム視点」を受け継ぎながらもそれを越えようとしていることを意味するのだろうか。

第3部は、女性労働論—現代フェミニズムの視点から—のテーマのもと、既述の竹中氏を先頭に、久場嬉子(「グローバルな資本蓄積と女性労働—ドイツ・マルクス主義フェミニズムの問題提起によせて—」)、川東英子(「マルクス主義フェミニズムに関する一考察—上野千鶴子氏の見解の批判的検討—」)、服部良子(「日本の経営下の女性労働と家族生活」)、木下順(「アメリカ合衆国における女性運動と歴史認識—労働史研究を中心に—」)の5氏の論文が収録されている。

久場論文は、先述の竹中氏の第1の課題、すなわち、「ジェンダーの国際的再編成の理論的分析」を受けたものである。私も、これからの女性労働論は、この視点無しには展開できないと考えているので勉強になった。

これら論文のテーマは、40年の研究の蓄積の上での現在の竹中氏の問題関心の広さと新しさを示すものに他ならない。このような形で、知的刺激と研究課題を与えてくれた竹中氏に感謝し、道なお遠い私の研究の旅の糧とさせていたきたい。

(ミネルヴァ書房・1993年7月刊)

(昭和女子大学女性文化研究所教授)